

# 信仰と愛——アンティオキア教会の始まり

使徒言行録 11 : 19 - 30



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年5月6日

復活節第6主日

奈良基督教会にて

今日の聖書日課の使徒言行録には、シリアのアンティオキア教会の始まりのことが記されていました。

「11:19 ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。20 しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。」

エルサレムの教会の力ある指導者ステパノが石で打たれて殺されたことがきっかけとなって、エルサレムの教会に対して迫害が起こり、多くの信徒たちがあちこちへと散らされて行きました。

こうしてエルサレムのずっと北の方、シリアのアンティオキアという当時の大都会に教会が成立し、このアンティオキアの教会がイエス・キリストの福音を世界に広める基地の役割を果たすようになりました。パウロの3回にわたる伝道旅行は、このアンティオキア教会を出発地としたのです。

アンティオキアに行った信徒たちは、初めは同じ言葉を使うユダヤ人に、やがてさらにはギリシア語を話す人たちにもイエスの福音を語ったので、信じる人の群れは大きくなっていきま

した。

**「21 主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。」**

これを大切にしたい。だれかがイエスさまのことを語らなければ、伝わらない。しかしそれには勇気がいります。そして愛が必要です。しかしほんとうに人を生かし、闇から救うのはイエス・キリストなのですから、勇気と愛を与えられて、機会があるなら、機会あるごとに、人にイエスさまのことを伝えたい。そのとき、わたしたちには主の助けが与えられるのです。

**「21 主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。」**

主がこの人々を助けられた。ここはギリシア語原文を見ると、「**主の手が彼らと共にあった**」と書いてあります。主イエスを伝えようとするとき、主イエスの手がわたしたちを包み、支え、守ってくださる。主イエスの手が共に働いてくださる。こんなに力強いことはありません。こうしてアンティオキア教会は発展していきました。

今日はそのアンティオキア教会の中から、3人の人を紹介したいと思います。具体的な人がいて、その人たちと共に祈り働く人々がいて、教会は根を下ろし成長していくのです。

第1はバルナバです。アンティオキアに教会が誕生して発展しつつあるといううわさが聞こえてきたので、エルサレムの教会はバルナバをアンティオキアに派遣しました。

「11:23 バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。」

バルナバがアンティオキアに到着したとき、彼は喜んだ。彼はまず、そこに神の恵みが与えられた有様を見て喜んだのです。と同時に、アンティオキア教会の弱点も彼には見えました。まだ、信仰がふらついているところがある。それでバルナバは「固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた」。困難があっても、迷いがあっても、主から離れてはいけない。主イエスはけっしてあなたがたを見捨てられることはないのだから、主から離れないように。主イエスにつかまっているように、と彼は勧めました。

もうひとつバルナバがした重要なことがあります。それは、パウロを探しに行つて教会に連れ戻したことです。あのかつてのキリスト教迫害者パウロ。回心して熱心な伝道者となったパウロ。そのパウロをエルサレムの教会の指導者に紹介して、信頼関係を結ばせたのもバルナバでした。しかしその後何があつ

たのでしょうか。パウロは故郷のタルソスに引きこもってしま  
った。そのパウロを探して見つけ出し、アンティオキア教会に  
連れ戻した。バルナバはそこで丸1年の間パウロと一緒にいて  
多くの人々を教えました。このバルナバとパウロの協力のおか  
げで、アンティオキア教会は信仰と愛に燃える教会として発展  
しました。

こうしてやがてアンティオキア教会は、遠く外に向けて宣教  
師を派遣する教会になります。それをさせるのは聖霊です。13  
章にこう書かれています。

「13:2 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。

『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。  
わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるため  
に。』3 そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて  
出発させた。」

「祈り、二人の上に手を置いて出発させた」。手を置いて祈っ  
てもらうことで神の力、聖霊を注がれるのです。このようにし  
てバルナバとパウロは、アンティオキア教会から出発して福音  
を遠くまで運んでいくことになったのです。これで2人を紹介  
したことにしましょう。バルナバとパウロです。アンティオキ  
ア教会には、信仰と愛があって成長していきました。

それから 50 年あまり時が経ちました。2 世紀の初め。アンティオキア教会は、ローマ、アレクサンドリアとともにキリスト教の一大拠点となっていました。しかしこの頃から、ローマ帝国によるキリスト教迫害が厳しくなってきます。時のアンティオキア教会の指導者は、アンティオキアの第 2 代主教とされる**イグナティオス**という人でした。今日の 3 番目の人物です。

紀元 107 年頃、イグナティオスはローマ帝国によって死刑を宣告されました。その頃彼は 70 歳を越えていました。彼が生まれたのは紀元 30 年頃とされるので、ちょうどイエスさまが地上の生涯を終えられる頃に生を受けたのです。

イグナティオスは自分のことを「テオフォロス」（神を担う者）と呼び、手紙の書き出しにはいつもその言葉を記していました。自分は神に仕え、神からの使命と重荷を負い、神を持ち運んでいる——そういう強い自覚があったのでしょうか。

イグナティオスは捕らえられて、ローマに護送されていきました。その頃、ローマでは大きな戦争勝利の祝賀祭が計画され、そこで彼は見世物として殺されることになったのです。

これを知ったローマの教会では、何とか彼を助け出そうとしていました。そのことがイグナティオスに伝わったとき、彼は

ローマの教会の人々に、自分を助けないように頼んだそうです。彼の願いは生き延びることではなく、キリストの苦難にならない、自分の命をささげて真のキリストの弟子となることでした。彼がローマの教会の人々に願ったのは、自分がこの試練に立ち向かう力を持つことができるように祈ってほしい、ということでした。

彼は手紙の中でこう言います。

「わたしが苦難を受ける時、わたしはイエス・キリストにあって解放され、キリストとともに自由な者としてよみがえるでしょう」

「もしあなたがたがわたしについて沈黙するなら、わたしは神の言葉となるでしょう。しかし、もしあなたがたがわたしの肉に対する愛に動かされるなら、わたしは再び人間の声になってしまうのです」

イグナティオスにとっての使命また願いは、自分が神の言葉となることでした。自分の存在と言葉と振る舞いをとおして、人々が神の言葉を聞くようになることが願いなのです。

しかしローマの人々が彼の命を守ろうとして自分を救うなら、自分は神の言葉ではなく、ただの人間の声になってしまう。人々は神の言葉を必要としているのです。

こうしてイグナティオスは、兵士の槍と野獣の牙によって、70年余りの生涯を閉じたのでした。

アンティオキアの教会は決して理想的な教会ではありませんでした。内には分裂と争いがあり、福音をねじ曲げる人たちの悪しき影響がはびこっていました。しかし、そこにはなお、まことの信仰と愛が燃えていました。アンティオキアの教会の集まりを始めた無名の信徒たちと、バルナバとパウロと、そして後にはイグナティオスと、また彼らと共に祈り働いた人々の内に燃えていた信仰と愛が、多くの人々に命を吹き込み、福音は世界に伝えられることになったのです。

祈ります。

神さま、今日はアンティオキア教会の始まりのことを聞きました。アンティオキアから福音が広がって、ついにはわたしたちの所にも届きました。バルナバ、パウロ、イグナティオス、また多くの人々のうちに燃えていた信仰と愛をわたしたちにもお与えください。困難があっても、過ちがあっても、葛藤があっても、主のみ手がわたしたちを包み、支え、力づけてください。神さま、この教会にもアンティオキア教会に注がれた聖霊を注いで励まし、導いてください。主のみ名によってお祈りいたします。アーメン